

---

# それさえもおそらく普通の出来事

AQUA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それさえもおそらくは普通の出来事

### 【Nコード】

N6877N

### 【作者名】

AQUA

### 【あらすじ】

そろそろおばさんと呼ばれることにも慣れ始めた、ごくごく普通な専業主婦、みやつか宮東さつき。

『ねえ、お星様。あたしがもしもぜんぜん普通じゃなかったとしたら、一体どんな人生を歩んでいたと思う？  
もう少し、ワクワクドキドキ出来ていたのかしらね？』

秋空にひとときわ輝く星に何気なく問いかけたその日、彼女の『普通』

は終わりを告げた・・。

## 序文（前書き）

お初にお目にかかりますAQUAと申します。

初投稿ですので、多分にお目汚しがあるかと思っています。

生暖かい目でお読み下さい・・・m┐┐m

## 序文

「もう9月かぁ・・・」

ベランダの手摺りに身を寄せ、紫煙・・・と言うには少しばかり薄い灰白色の煙と一緒に吐き出した呟きに、宮束さつきは我が事ながら思わず苦笑を漏らした。『もう』と言うからには、何か比較となるような基準があつてしかるべきなのに、それがまったく思いつかなかったのだ。

夜空を見上げていた視線を下げ、右手の人差し指と中指で挟んだタバコの先に灯った炎を見つめてみる。  
けれど、そんな事をしてみてもやはり何の基準も対象も思いつかない。

ああ、しょーもな。

もう一度、今度はわざと苦笑してそのタバコを啜え、胸いっぱい煙を吸い込んで、また空を見上げた。  
東の空に、さつきまで気が付いていなかった一際明るく輝いている星をひとつ見つけて、ほんの少しだけ気持ち在和むのを感じた。

「さつきー。そろそろ鍋、煮えるぞー」

「はいはい。これ吸い終わったら、入るー」

窓ガラスの向こう、リビングから掛けられた声に、声だけで返事を  
して、また煙を吐き出した。

あたしって、ほんと普通よねえ・・・。

宙に流れ消えていく白煙を眼の端で追いつつ、心の中だけで一人ごちる。

そう。彼女は、世間一般の観点で見ればごくごく普通としか言いようのない人生を歩んでいた。物心つくまでも、それからも、ずっと義務教育の9年間と女子高校生と呼ばれていた3年間は、生徒会や委員会の役員をするでもなく、部活で華々しい活躍をするでもなく、高卒で就職したホームセンターでは、何人もいる事務員の中の一人として、毎日のルーチンワークを淡々とこなしていただけだった。馴染み業者の営業だった夫と知り合い、いつの頃からかプライベートルドと一緒に出かけるようになり、恋に落ち、プロポーズを受け結婚した事も、よくある事でしかない

ドラマや映画のような『特別』な事は何一つとして起こらない、遭遇する事もない、絵にかいたような平凡な人生。

アニメや小説に出てくるような『非日常』的なワクワクやドキドキに、憧れた時期が無い事もない。

けれど、そういう『非日常』が日常となってしまうている主人公達がそれで幸せなのかといえば、文中に『俺の（私の）日常を返してみたいな表現がある以上、意外にそうでもないらしい。

『所詮、隣のバラは赤いなよねえ』などと感じる程度には、現実甘んじている。そんな、どこまでいっても普通の主婦。

それが、当年とって30歳、そろそろおばさんと呼ばれることに慣れ始めてしまった、宮東さつきという人間だった。

根元の方、フィルターの手前まで吸ってしまったタバコを、エアコンの室外機の上に置いた灰皿に押し付けて残り火をもみ消した。

もう一本、吸おうかな。

そう思ったけれど、先ほど返事をしてしまった手前、それも拙い。大きく溜め息をついて、手摺りから離れた。窓に手をかけ、ふと思いついて振り返り空を見上げると、先ほどの明るい星はまださつき

の場所に輝いていた。

ねえ、お星様。あたしがもしもぜんぜん普通じゃなかったとしたら、一体どんな人生を歩んでいたと思う？

もう少し、ワクワクドキドキ出来ていたのかしらね？

それは問いかけというよりは、願望の吐露に近かったかもしれない。ふっ、と吐息をついて。さつきは、改めて窓枠にその手を伸ばした。

## 序文（後書き）

誤字・脱字のご指摘、ご感想などございましたら、お気軽にお願いいたします。

更新ペース『蝸牛のごとし』かもしれませんが、完結はさせるつもりです・・・。

- - - - -

2010/10/23 改行、字下げなど修正

2010/10/24 改題



## 01 「『月』からの来訪者」

うつわ。ヨワそー。

土曜の気だるい午後。

昼食の片づけを終え、朝からソワソワと落ち着かなかった夫は、ご希望通りパチンコ屋に送り出した。

さて少し休憩だ、とばかりにソファに身を投げ出そうとした、まさにその時。

狙いすましたかのように来客を告げたドアホンの、液晶画面に映る男の第一印象がそれだった。

たつぷり10秒程はその映像に見入ってしまったから、はっ、と我にかえる。

いけない。お客さんだったんだ。

慌ててエプロンを外して髪を手櫛で整え居住まいを正し（とはいえ、相手にこちらは見えていないのだが）、応答ボタンを押し込む。

「はい。どちらさまでしょうか？」

「あ、こんにちは。わたくし、弁護士はかまの袴と申します」

「・・・弁護士さん？」

「はあ」

宗教や新聞の勧誘なら一言で斬って捨てて追い払ってやろう、と意気込みかけていた頭の中が、一瞬真っ白になる。

へらっ、としか形容の出来ないユルい笑顔を向けてくる、弁護士を名乗る男。

何とはなしに、ドアホンの応対だけで追い払うのは無碍むげも無いと感

じて、とりあえず話を聞いてみるくらいならいいか、とドアに向かった。

「改めまして、こんにちは。わたくし、『つきのは月葉弁護士事務所』から参りました、袴と申します」

リビングを占拠するソファセットの対面に腰を下ろし、少しよれた名刺を差し出す袴弁護士に、さつきは内心の苦笑を禁じ得なかった。あまりにも第一印象そのまま、いや、それ以上に、見るからに『ヨワそう』なのだ。

貧弱というわけではない。

上背はあるし、かつちりした肩幅は十分広い。パリッとノリのきいた半袖のYシャツから伸びる二の腕は、知り合った頃からずっと外商の営業を続けている夫のそれに負けず劣らず、とまではいかないものの、程よく日に焼け、筋肉もついているようだ。

しかし。

前かがみ気味に丸められた背筋。エアコンが効いた部屋の中にいるというのに、なぜか頻繁に額の汗をハンカチで拭うその仕草。ややたれ目気味な目。まっすぐ合わせようとせず、落ち着かない目線。へらへらとしたしまりのない笑顔。

プラス要素を打ち消すマイナス要素が強すぎて、どうにもこうにも軟弱な印象を覚えてしまう。

「ええと、表でお話させていただくもの少々アレな話ですので、出

来れば・・・」などという言葉とその纏う雰囲気、つい頷いて部屋に上げてしまったのだから、弱々しさとナントヤラは使いよう、とても評してあげるべきなのかもしれない。

「・・・で。その弁護士さんが、どんな御用でしょう？」

無意識に見つめてしまっていたらしく、笑いが少々困ったようなそれに変わっている袴弁護士に気が付き、名刺を受け取りつつ大袈裟にコテンと首を傾げて見せる。

無料相談だとか、そういうのにお申し込みしたような覚えもないし。

まさか、ダンナが・・・・・・・・って、そんなわけないしねえ？

お小遣いに渡した一万円札を大事に大事に財布に収めていた、邪気のまったく無い笑い顔を思い出す限り、隠し事があるようには到底思えなかった。

こんなにヨワそうな人を雇っているのだから、『月葉弁護士事務所』とやらも細々と経営している小さな事務所なのだろう、などと失礼な事すら考えてしまう。

どこぞに依頼された国勢調査もどきのアンケートか、最近とみに増えているという、振り込め詐欺や悪徳金融の被害調査、あわよくば弁護の依頼をとるための営業か。

「実は、ですね・・・」

そう言つて、袴弁護士がその分厚いA4サイズの茶封筒をカバンから取り出すまで。

さつきは、それが自分自身に関わってくる事柄だとは、全く考えていなかった。

「・・・はあ?????」

開口一番に夫、宮東伊知郎いちろうが漏らしたのは、「ポチ」という名の「猫」でもみたかのような、そんな声だった。

その気持ちも分からないでもない。

貰った小遣いを増やせはしなかったものの、どうにか減らさずに帰ってきて、少々早めの夕飯を食べようかという席で聞かされたのが、荒唐無稽も甚だしい話だったら誰でもそうなるだろう。

しかも。

「だからあ。なんともわからんちんだけど、あたしをご指名らしいの」

箸を咥えたまま、テーブルの端に居座る茶封筒とその上に引き出された書類の束に向けるさつきの目にも、多分に懐疑的な色が浮かんでいるのがそれに拍車をかけている。

「だからってなあ・・・。っていうか、さつき、お前それ信じるのか？」

「んー・・・。けっこうあやしいよねえ・・・。」

「怪しさ大爆発だろっ!？」

箸を取り落とす勢いで、我慢ならないとばかりに、びしっ、と指差す書類の一枚目には、黒々とした毛筆の流れるような筆跡で、こう

書かれていた。

『宮束家 後継選定の儀 次第』と。

袴弁護士は語った。

平城の時代から続く由緒正しい家柄の一つに「宮束一族」がある。表の社会に名を出す事は一切無く、社名や、株式投資、ヘッジファンドなどで『商品』『商標』としてその名を知られる事すら無いその一族は、しかし、何時の時代も歴史の裏でその栄華を極めていた。いや、極めている、と。

「これがその一族の家紋です」と、三枚の竹の葉を図案化したバツジを見せられて、さつきはその話に、少くとも一部は真実だろうと感じた。

街に出かけた時などに、コンビニや商社の看板に幾たびか同じ図案を見かけた事があったからだ。

ただ、その全てがそれぞれに「宮束」ではない別の名を名乗っているから、その関連性には全く気が付かず、たまたま良く似た社章なんだなあ、程度の感慨しか抱いていなかったのだが。

その一族の総帥たる「宮束総柄<sup>そつえ</sup>」が、突然の病に倒れたのは、今から半年ほど前のこと。

兄の死によって総帥の座に就いた総柄は息子や娘を持たず、兄弟・姉妹もいないために後継者がいない。

これから子を成す事も出来ず、かといって、一族に深く関係してい

るとはいえ宮束の血の流れていない者に、家督を譲るわけにはいかない。

焦りを覚えた総柄は、側近全てに指示を出した。「系譜を遡り、宮束の血を継ぐ者を探し出せ」と。

困ったのは側近一同だった。

そもそもこれだけ力を持つ一族の純血であるなら、総柄の近くにいないわけが無い。

それが今の時点で総柄のみしかいないというなら、総柄こそが一族の最後の一人なのではないだろうか。

探すだけ無駄なのではないだろうか。総柄がそれと認める者に、後を任せてしまってもいいのではないだろうか。

しかし総帥の命令は絶対。

無駄なことかもしれないとは思いつつ、信用のおける筋を利用して、一代、二代と系譜を遡っては、その人間関係（愛憎関係と言ってもいい）を調査し。

血が受け継がれている可能性があると分かれば、健康調査や保険勧誘を名目にDNA鑑定まで行い。

そして半月前。ようやく九代前の総帥の弟、「宮束詠之進<sup>えいのしん</sup>」の血統に辿りついた。

「ちょっと待って。九代前って、何時の時代の話よ」

「ざっと200年くらい前でしょうから、江戸後期くらいでしょうか？ 確か、滝沢馬琴の南総里美八犬伝が発行されたのが、その頃だったと思いますよ？」

「・・・知らないわよ。そんなの」

壮大なというべきかなんと言っべきか、半ば呆れかかっているところに、袴弁護士はさらに説明を続ける。

家を捨てた詠之進は、一族という枷に縛られることを嫌い出奔した（らしい）。

流れ流れて豊前国一（九州北東部辺り）に辿りつき、そこで妻を娶って子を持った。子はさらに子を成し、その子もまた同じく。そして200年近い時が流れた。

空いた口がふさがらない、というのは正にこの事を指すのだろう。いや、寧ろ呆れて物も言えない、の方だろうか。

話の行きつく先が見えた。しかし、そんなはずはない。

ワザと大きな溜め息をつき、頭を左右に数回振り、さつきは、にこやかな薄笑いを浮かべ続ける来訪者にジト目を向けた。

「あのね」

「はい、何でしょう？」

「『宮束』って姓は夫のもので、あたしの旧姓は『竹本』なんだけど？」

あまりにもバカバカしい話に、ここまで付き合っただけでも感謝してほしい、と目一杯の含みを持たせたその一言に、なぜか我が意を得たりとばかり大きく身を乗り出す。

「実は、ですね。豊前国に流れ着いた詠之進は、妻を娶る際に別姓を名乗ったんです」

「まさか？」

「そうです。その際名乗ったのが『竹本』の姓なんです。いやあ、偶然ってすごいですね。『宮束』の姓を捨てた人の子孫が、『宮束』さんと結婚してその姓に戻るなんて。これこそ運命としか呼べないですよ」

放っておけば、それこそ拍手でもしかねない雰囲気で、しきりに頷くにやけ男。

「・・・で。弁護士さんは、それを信じてるわけ？」

「はい。もちろん」

にこやかな笑みは相変わらず、男はきっぱりはつきり言い切った。

「宮東さつきさん。貴女は『宮東』の直系であり、そして後継者候補の一人です」



01 「『月』からの来訪者」(後書き)

誤字・脱字のご指摘、感想などございましたら、お気軽にお願いいたします。

[illegible]

2010/10/23 改行、字下げなど修正

2010/10/24 改題

2010/11/06 改題（タイトル頭に半角スペースが入っていたので除去）

## 02 「いざ、鎌倉」

「・・・なあ、ほんとに行くのか？」

車窓の向こう側、遮音塀の上と継ぎ目から覗く町並みと空に目を向けたまま、ぼそりと呟く伊知郎いちろうに、さつきは苦笑いするしかなかった。

ここまで来ておいて、まだ言う？

言葉にはせず心の中だけで応えを返し、聞こえなかったフリをして膝の上、手提げカバンの中を漁る。目当てのものは、すぐに見つかった。

「伊知郎も、食べる？」

視界に入るように差し出したミント系の板ガムを、こちらを見ないまま指先だけで受け取り、さつさと包み紙を剥がして口に放り込む。くっちやくっちやと、いつもより大きな音を立てて噛みしだく、不機嫌そうな横顔。

こういうところはお子様なのよね。この人ったら。

自分も同じようにガムを口に放り込む。

一噛み毎にやってくるミントの刺激を楽しみつつ、さつきはゆっくりと目を閉じた。

「次は新山口。新山口です」

アナウンスが聞こえる。目的地はまだまだ先だ。

『宮束家<sup>みやつか</sup> 後継選定の儀 次第』は、こんな招待文から始まっていた。

「宮束さつき 殿

故 宮束斗一郎<sup>といちろう</sup>の末弟、故 宮束詠之進<sup>えいのしん</sup>改め、竹本詠之進の血統を受け継ぐ貴殿を、宮束家総帥位後継候補としてお迎えしたく候。ついでには、当家までお越しいただきたく候。

宮束家総帥 宮束総柄<sup>そうへ</sup> 拝

長い年月栄華を極めているという一族。

その総帥からの文としては、あまりにも簡潔で事務的なそれは、自他共に認める『普通人』たるさつきをもってして、「嘘くさっ」と呟かせるに十分すぎるものだった。

しかし、続く数十枚にわたって記された血統調査の記録は、重箱の隅を箸でつつくに飽き足らず、塗りの隙に詰まったカスですらも爪楊枝で穿り返したかのような、微に入り細に入った堂々たる代物。<sup>はかま</sup>袴弁護士が妙に誇らしげに、「聞いた話ですが、興信所やらなにやら、千を超える組織が動いたそうですよ」と語っただけの事はある。

ちなみに、正統な血統というなら、亡くなっている祖父は仕方が無いとしても、まだ存命なさつきの父はどうなるのかと問いかけたと

ころ、「現総帥よりも年若い方」を基準としているとか。  
納得出来る話ではあるが、そこはかない胡散臭さが感じられない事もない。

「で……。どうするつもりなんだ？さつき？」

「うん。行ってみてもいいかなって思ってる」

予想に反して肯定的な答えを返したさつきに、伊知郎は絶句し、次の瞬間、猛烈に反論した。

曰く。話が出来すぎてる。こんなシンデレラ・ストーリーは物語の中だけで、現実にあるはずがない。

千以上もの組織を動かすような、そんな大規模な調査がたった半年で行えるはずがないし、九代前、江戸時代の記録なんて眉唾もいところ。

何より、そんな一族が、過去の系譜を頼らないといけなくなるような、杜撰な『家族計画』をしているわけがない。

『ハイハイ詐欺』や『紹介詐欺』、あるいは『結婚（婚約）詐欺』に類するような、<sup>はかりごと</sup>謀に違いない。などなど。

立て板に水、流れる水のように紡ぎ出されるいちいち尤もな言葉に、同意とばかりしきりに頷く愛妻に、やがて吐き出す言葉も勢いを失った頃。

「嘘っぱい話だとは思ってるよ」

聞こえた言葉に、伊知郎は耳を疑った。

「じゃあ、何で？」

信じられないという表情で見返してくる夫に、さつきは苦笑を漏らす。

「これが嘘や騙し事だとしてさ。あたしみたいなごくごく普通の専業主婦を引っかけろのに、こんなに分厚い資料をでっち上げたり、支度金とか言って大金置いて行ったり。なんでそんな事するんだと思う？」

「え？・・・そりゃ・・・いや、わからんけど・・・」

流れる視線の先には、袴弁護士が「支度金として預かって来ました」と置いていった、福沢諭吉が刷り込まれた札の束。

封印がそのままなところをみれば、そして一枚も抜かれていないとすれば、きっかり百万円。

「あたしも分からない。だから、それを知りたい。『好奇心はネコを殺す』って言うけど。ひよつとしたら大掛かりな騙しなのかも知れないけど。だけど、そんな事をするだけの、何があたしにあるっていうの？・・・それにね・・・」

「それに・・・？」

「それに、もしも本当だったら、あたしたち大金持ちだよ？」

小さく弾けたはにかむような笑顔。

そう思わせる事が騙しの常套手段だ。とは言わなかった。否、言えなかった。

さつきはちゃんと分かっている。分かっている、相手に乗ってみると言っている。それなら。

伊知郎は、小さく溜め息を吐き両手を挙げた。

「わかった。じゃ、俺も一緒に行く」

「うん。ありがとう」

「ようこそお出で下さいました。長旅でお疲れのところ、誠に申し訳ございませんが、主人が一刻も早くお会いしたいと申しております」

執事長を名乗り優雅に一礼した、燕尾服姿の初老、ロマンズグレートカブセ高節氏の案内に従って、長い長い板張りの廊下を奥へと進む。

一体どれだけ部屋があるのか、建坪はどのくらいなのか。

あ、また御手洗いみつけ。

3つ目だったかな。お金持ちって、すごいねえ。

そんな暢気なことでも考えていなければ、『伝統』や『格式』と言う目に見えない圧力に、今にも呑み込まれてしまいそうだった。

延々と連なる、果ての見えない白壁と沿道。

大型車でも楽にすれ違えそうな、瓦葺きの門構え。

門から屋敷まで、蓮の浮かぶ大きな池をぐるりと回り込む、石畳の通路。

玄関先で2人を出迎えた、ずらりと並んだ使用人たち。

これでもか、とばかりに見せ付けられる、到底偽りとは思えない『一族』の力。

隣を歩く伊知郎は、完全に気圧されてしまっているのか、視線を彷徨わせる事すらせずに、唯々諾々と歩いているだけのようだった。

「こちらでございます」

声と共に、一同の足が止まる。

長大な通廊の果てにあったのは、精緻な彫刻に縁取られた両開きの扉だった。重厚な雰囲気纏うそれが、高節執事長の手によって、ゆっくりと左右に割り開かれていく。

「さつき様、伊知郎様。どうぞ、お入りくださいませ。主人がお待ちでございます」

いざ鎌倉、かな。

思わず手を伸ばし、ぎゅっと握った伊知郎の手は、しかし冷たく、震えるさつきの手を握り返してはくれなかった。

## 02 「いざ、鎌倉」(後書き)

誤字・脱字のご指摘、ご感想などございましたら、お気軽にお願いいたします。

なかなか話が進まず、本題に入れません。トホホです・・・。

-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2010/10/24	2010/10/23	改行、	字下げなど修正	改題					



### 03 「宮束総柄」

「宮束さつきさん、でしたな。ようこそ参られた」

目の前、向かい合うように腰を下ろし深々と頭を下げる壮年の男に、さつきはなんとも言えない戸惑いを感じていた。

渋柿色の着物に焦茶色の羽織を纏ったその男が、紹介して貰ってはいないもののおそらくは宮束一族の総帥である、宮束総柄そうへその人なのだろう。

窮屈そうでなくかといって持て余しているようにも見えない着こなしや、無理のない落ち着いた正座姿から、和服を着慣れている事がありありと分かるし、着ている物は素人目に見ても仕立てが良い。おそらくは、いや間違いなく名の知れた工房の一品物なのだろう。

そして何より目が違う。

柔和な微笑みの中、その瞳にも柔らかな色が湛えられている。

しかし、確かに感じる『力』。

決して睨み付けられているという事はないし、見下されているという事もない。他を圧するような居丈高な雰囲気があるわけでもない。それなのに。

見られている、観察されている、とはつきり感じる。気配、格、そういう言葉で置き換えた方が分かりやすいかもしれない。

『そこに居る』という圧倒的なまでの存在感が、その視線から感じられる。

だけど・・・。

さつきは男の言葉に強い違和感を感じていた。

『宮束』の部分に、やけに強いアクセントをつけていた。それ以外

の部分がすんなりと耳に流れ込んできたため、余計にそう感じるのかもしれないが、それにしても。

耳慣れない言い慣れない言葉なのであれば分からないでもない。しかし自分の苗字は男のそれと同じ。

そんなはずは有り得なかった。

ちら、と目だけで隣に座っている夫・・・伊知郎いちろうの様子を窺うかがってみるけれど、緊張しているのか、やけに硬い表情を浮かべているものの当惑しているような気配はない。

あたしの気のせい・・・なはずはないし。

思いの淵に沈みかけた刹那、自分がまだ挨拶を返していない事に思い至り、はっとした。

「は、はじめまして。宮東さつきです」

「私はさつきの夫で、宮東伊知郎と申します」

少々タイミングの遅れた挨拶に、しかし男は気を悪くした風でもなく鷹揚に首肯した。

「さつきさんと、伊知郎さんですな。私が、家長かちようの宮東総柄そうがらです。いや遠路ようこそ。さぞやお疲れになった事でしょぅな」

にこにこ柔らかい微笑みを浮かべ、おもむろに柏手かしわでを打つ。

「お呼びでございますか」

脇の障子が、すっと開いて、正座に三つ指をついたメイドが姿をみせる。和室にメイドとは和洋折衷も良いところなのだろうが不思議

と違和感がない。

和洋折衷といえ、この部屋自体もかなり凝った造りになっている。さつき達を通った扉から部屋の中程までは木目も美しい板張りのフロアなのだが、そこに二段の段と部屋の端から端までを横切る通路が設えられ、その奥に障子で仕切られた和室が鎮座する。

手近なところでは居酒屋などの座敷タイプの個室に近い印象だが、広さで言えば大宴会場並み、部屋の調度は大名屋敷のそれと比べてみても勝るとも決して劣りはしないだろう。

「うむ。客人をお部屋へ案内して差し上げなさい。・・・あと膳もな」

応えを返しておいて、総柄はさつき達に視線を向けた。

「小難しい話は明日にでも。今日はゆっくり休まれるがよろしかろう」

宮東本家、逗留2日目。

広々とした客室での休息と山海の幸を尽くした中にも遠来の客人を労わる趣向を凝らした食事に、長旅の疲れを完全に癒してしまったさつき達は、今日も大部屋に案内されていた。

昨日は気がつかなかったが、使用人たちが用を足すのに使われている側と反対側の障子の向こうには枯山水の庭園が設けられていたよ

うだ。

開け放たれたその向こうで涼やかな風に木々の小枝が揺れていた。

「ゆつくりと、お休みになれましたかな？」

メイドが運んできた湯飲みを啜りながら問いかける総柄は、枯草色の着物で昨日とかわらぬゆつたりとした微笑みを浮かべていた。

とはいえ、やはり身に纏うその風格には、さつき達・・・所謂『庶民』とは一線を画すものがあつた。

気圧され無用な緊張に身も口も堅くなってしまう2人に、しかし総柄はその相好を崩しつつ、自ら様々な話を舌に乗せていく。2人が道中通り過ぎてきたはずの町や都市、その近隣の特産や名産に関する含蓄。

スポーツや政治、経済情勢といった時事、芸能関係のゴシップ。

そして、その話術はただ話題豊富なだけではない。

さつきや伊知郎がその話題についていけない、ついていけない、いやついていけなくなりそうになるかならないか、そんな微妙な気配すら敏感に察し、その掘り下げる深さを柔軟に変え、または流れるように次の話題に前の話題に移行<sup>シフト</sup>していく。

窓の外に覗く枯山水の醸し出す長閑な雰囲気も手伝ってか、いつの間にかさつきも伊知郎もその緊張を和らげ、本人達も気が付かないうちにごく普通に会話を楽しめるようになっていった。

そして。

「さて。」

小一時間程も経ち、数回目のお茶のおかわりを運んできたメイドが退室したところで、総柄が、すっと居住まいを正した。

「他愛ないお喋りもこれはこれで悪くはありませんが、そろそろ本題に入らせていただきましょうかな」

びっくり、と伊知郎が肩をすくめるのを横目に見ながら、さつきも姿勢を正す。

「まずは、ひとつお詫びせねばならない」

「お詫び……ですか？」

「ええ」

「それは？」

問い返しながらも、さつきは脳裏に一番ありがちな展開を想像していた。

それは、ここへ来る前から多少なりとも疑っていたこと。

後継候補というのは真っ赤な嘘で、金持ちの道楽に付き合わされただけ。

ちよつとばかりの詫び金も貰えれば良い方で、体よく追いつ返され、この壮年はちよつとばかりの昏い満足感を得、自分たちは自己嫌悪と『金持ちは信じちゃいけない』という人間不信を得る。

無料で一泊旅行が出来ただけまだマシ、と自分で自分を慰めながら日常へと還る。

そんな想像だ。

「さつきさんが当家の後継候補の一人、という話なのですが」  
「はい」

そら来た。

さつきは笑顔に力を入れた。

騙されたのは仕方ないが、がっかりしたような顔を見せて最後まで喜ばせてやる義理はない。

伊知郎も内心はどうであれ営業で培ったポーカークフェイスを貫くだろう。

「下の者の手違いがあつたようで、誠に申し訳ないのですが」

部下に責任をなすりつけるのは金持ちの常套手段。

さつきは身を堅くし次の一言を待った。

「候補者は、さつきさんお一人だけでした」

「そうですか」

そういう事でしたら・・・と迷わず腰を上げ暇を告げる。

そう気を張っていたさつきの耳に届いたのは、全く予想を外した総柄の言葉だった。

今、なんて言われた？

「え、と。あの、それはどういう？」

気を利かせた・・・つもりなのだろう。

出鼻を挫かれた感覚に当惑し半ば放心しているさつき本人に変わって、伊知郎が口を挟む。

「どういう、とは？」

「いえ・・・、その・・・、候補者がさつき一人・・・とは・・・？」

「ああ。ええ、そうです。当初、と云つてもつい先日ですが、候補者として名前の挙がった方は、さつきさんの他にもうお一方お

られました」

「はあ」

なお困惑から覚めやらないさつきを置いてけぼりにしたまま、総柄は言葉を続ける。

「それで、ご案内に伺った者にはその旨もお伝えするよう指図をしておいたわけです」

「・・・ええ。それは伺ってます」

さつきを訪れた袴<sup>はかま</sup>弁護士は、確かにそう言っていたはずだ。さつきは『後継者候補の一人』だと。

「ところが、ですな。もうお一方の所へ出向いた者からの報告で、その方がつい先日事故で亡くなられていた事が分かりましてな」

「・・・はあ」

「それで、結果的には候補者がさつきさんお一人だけだった・・・と。こういう次第なのです。いや、まったく申し訳ない」

謝辞を口にし深々と頭を下げる総柄に、しかしいまださつきの頭はついていっていなかった。

対立候補・・・と言っているものならばだが・・・、それがいないという事はどういう事か。

「あ、あの」

「はい」

「あたしが唯一の後継者候補、という事ですか？」

「さようです」

窓から入る秋の柔らかい日差しの下、好々爺然とした微笑みがしつ

かりと頷くのを視界に留めながら。  
さつきの意識は暗転した。



03 「宮束総柄」(後書き)

時間が開いた割には、短いです。

仕事と体調と・・・、一人称への誘惑の所為という事において

[illegible]

2010/10/23 改行、字下げなど修正

2010/10/24 改題

#### 04 「宮束さつき」

多少は期待していなかったかと言われれば、期待していたとしか答えられない。

自他共に否定のしようが無い一般庶民。

程度で言えば中の中、それこそ絵にかいたような中流家庭。

夫婦仲は決して悪く無い。むしろ良いほうだと思っている。

何の因果かまだ子供はいないけれど、だからこそ子供が産まれた時のために毎月積み立てをしている。

「いつかマイホームを買うか建てるかしてみたいよね」などと夫婦で話をした事もある。

夏と冬、2回のジャンボ宝くじは連番を20枚とバラを10枚、必ず買うことにしている。

2人はそんな普通の夫婦だ。

「お金持ちになれたらこんな事してみたいよね」と『夢』を見る、どこにでもいる平凡な夫であり妻だ。

だから『すごい一族の総帥後継者』という『夢』を見たのは確かな事だった。

だからこそ。

自分自身が巨大な財閥(?)の後継者候補、それもたった一人の候補だとはつきり宣言された事は、さつきの精神に大きな緊張を強いた。

『夢』というのは「もしも叶ったらすごいよね」と笑っていられるからこそ『夢』なのではないだろうか。

「『夢』は願うだけでなく叶えるものだ」などといったHOWTO本が流行する事がある。

けれど、それはもう既に『夢』というよりは『目標』になっているのではないだろうか。

はつきり言ってしまうならば、叶うという事をあまり期待出来ない、心のどこかで叶わないだろうと思っっている希望。

それが『夢』ではないだろうか。

それが叶ってしまう。いや叶ってしまった。幸せを感じるより前に、大きな大きな不安を感じた。

ひよっとしてシンデレラも同じような気持ちだったのかしら。(

1)

埒も無くそんな事を考えてしまう。

継母や異母姉たちに『灰被り』などと蔑まれ虐められていた彼女も、きつと『夢』を見ていたに違いない。

蔑まれる事も虐められる事もなく毎日を暮らす自分を。

他愛ない買物したり、友人と遊んだり、ひよっとしたら淡い恋をしてみたり。そんな普通の自分を。

そんな『夢』が、おそらくは想像を遥かに越えた形で叶ってしまったシンデレラ。

王子様に見初められてしまった時、彼女は何を想ったのだろう。

妃きさきとして王宮の住人となり、おそらくは生活そのものが一変してしまった時、彼女は何を想ったのだろう。

「・・・さ・・・つき・・・さつき？」

真つ暗な世界に声が響いた。

「・・・え？」

目を開けると、妙にぼやけた視界に黒っぽい影。

あ、焦点、合っていない・・・？

数回瞬きをしてみると、いつも見慣れた顔が心配そうに覗き込んでいるのが分かった。

「・・・あ・・・え・・・？ あた・・・し・・・？」

言葉にならない言葉を呟いている間に、あやふやだった記憶の糸がゆっくりと繋がっていく。

ようやく、どうやら自分は気を失ってしまっていたらしいと理解したさつきが見回してみると、そこはさつきまでいた和室とは別の部屋。

寝心地から想像するに、自分はどうやらベッドに寝かせられているらしい。

「あた・・・し？」

「・・・うん。びっくりしすぎたのかも知れないな」

さつきの額にかかった前髪を左右によけながら、伊知郎いぢろうの表情も少し硬い。

微笑も少し曇っているように見える。

「総柄さん、心配してたぞ？」

「・・・うん。そうだよね」

「後で様子を見に来る、って言ってた」

「うん」

8畳間ほどの広さの部屋には今、さつきと伊知郎の2人だけしかないようだった。

「ねえ・・・」

「うん？」

「あたし、どうしたら良いと思う？」

「うーん・・・」

漠然とした問いかけに伊知郎は眉を八の字に歪めて見せた。

困ったような表情で少し考えてから口を開く。

「まあ、さ」

「うん？」

「さつきが一番したいと思ったようにするのがいいんじゃないか？」

「そう？」

「うん。それで良いと思う」

「・・・そっかあ」

小さく、悩ましげな吐息を漏らすさつきの前髪をゆっくりと撫でながら、伊知郎は微笑む。

「ま、今は寝とけ」

「はあい」

目を閉じたさつきが安らかな寝息を立て始めるまで、伊知郎がその

手を止めることは無かった。

宮東本家、逗留三日目。

さつきが意識を失った日の翌日。さつきと伊知郎の2人は、またあの和室に招かれていた。

開け放たれた障子戸の向こうから流れ込んでくる涼やかな風が、床の間に活けられた白い花を穏やかに撫でて去っていく。

「昨日は、失礼しました」

「いえいえ、お気になされぬよう」

深く頭を下げるさつきと伊知郎に、総柄は柔らかな笑みを浮かべ鷹揚に手を振った。

「お体の方は、もうよろしいのですかな？」

「はい。おかげさまで」

「さようですか。それは良かったです」

穏やかな声音からはただ安堵のみが伝わってくる。

それを感じながら、さつきは小さく小さく深呼吸をした。

昨日のあの後。夕方過ぎにもう一度目覚めたさつきは、伊知郎に今後自分がどうしたいと思っているのかをはっきりと告げ、伊知郎はただ頷いた。

ただし、それもこれも総柄次第ではあるのだけれど。

「総柄さん」

一瞬の逡巡の後、さつきは口を開くことにした。

「失礼な事とは思いますが、お尋ねしたいことがあります」

「何でしょうか？」

「あたしが『宮東一族の後継者候補』というのは、本当の事でしようか？」

「はい」

打てば返す。間<sup>ま</sup>すら空けず総柄は答える。

「・・・小市民であるあたし達をからかっている、という事はありませんでしょうか？」

「そのように思われるのは、当然のことでしょうな」

聞きようによつては、いやどんな聞き方をしたとしても失礼極まりないだろうさつきの問いかけに、しかし総柄はそれも当然と頷く。

「ですが出来ることなら信じていただきたい。さつきさん、貴女は宮東一族の唯一の後継者なのです」

「後継者、ですか？」

「ええ。今となつてはもう『候補者』というのは当てはまらないでしょうな。私の、いえ宮東の後継者です」

「・・・そう、ですか」

「はい。ただし・・・」

「ただし？」

「さつきさんが、それをご了承下されば・・・ですが・・・こちらがどれほど望んだとしても、さつきさんご自身が拒否なさるなら、強要は出来ませんからな」

嘘、偽り、ごまかし。さつきには一切感じられなかった。

横目で見ると、同じようにこちらを窺っている伊知郎と目が合った。伊知郎が小さく頷く。

曲がりなりにも営業として駆け引きに慣れている彼にも、そういった物は感じられなかったようだ。

「分かりました。不躰な事をお尋ねして申し訳ありませんでした」

「いえ。当然の事でしよう」

「その上で、そのお話お受けさせていただけますでしょうか？」

「お受け、いただけるのですかな」

「はい」

総柄の眼を真正面から見つめるさつきの心に、もう迷いは無い。躊躇いもない。

宮東一族がどれだけ大きい存在なのか、さつきはまだ良く知らない。その総帥などという立場が自分に務まるのかどうか、そんな事はわからない。

しかし、必要とされているならやってみよう。ただそう考えているだけだった。

「ありがとうございます」

総柄が、宮東一族の現総帥が、まるで土下座でもするかのように畳擦れ擦れまで頭を下げた。

そして呟く。誰にも聞こえない程の小さな小さな声で。

「・・・大願、成就せり」



1 さつきは「本当は怖いグリム童話」などの原点系「シンデレラ」は読んだことがあります。

#### 04 「宮束さつき」(後書き)

誤字・脱字のご指摘、ご感想などございましたら、お気軽にお願いいたします。

ようちやく前置き(？)が終わりました。

## 05 「動き出す者たち」(前書き)

ようやく(?)、残酷描写が含まれます。  
読みたくない方は、回れ右。です。

## 05 「動き出す者たち」

鉄錆の香りに支配された薄暗い部屋。

大きく開かれた窓から音も無く揺れるレースを抜けて、雲間を縫った朧な月光が差し込んでいた。

青白く清らかなそれはテーブルに載せられたグラスを柔らかく満たし、そしてその男を白く染め上げている。

少し胸元を開けてラフに着込んだ黒っぽいシャツと濃い色のスラックス。

夜風に流れる赤みがかった頭髮とやや釣り目がちな眼。

テーブルのグラスを見つけ軽やかな足取りで近づいた男は、その中にアイスペールから取り上げた少し溶けかけた氷を一つ放り込んだ。

氷とグラスが触れ合って、澄んだ鈴のような音が響く。

ほんの少しだけその余韻を楽しんでから、慣れた手つきでキャップを外したボトルをゆっくりと傾けていく。

トクトクと音を立てて注がれる琥珀色の液体がグラスの月光を追いつき、<sup>かおり</sup>空気に甘い芳香が流れた。

一杯目は、一息に喉に流し込み嚥下した。

アルコールが己の消化器官を熱く、そして冷たく灼きながら落ちていくのを感じながら、すぐに二杯目を注ぐ。

二杯目は嘗めるようにゆっくりと、口腔に満ちる苦く甘い色と薫りを味わいながら。

「ふふつ。ずいぶん楽しそうにしてるのね」

艶やかな声が掛けられたのは、男が四杯目のブランデーを飲み干すの同時だった。

「そう見えるか」

返事は一言だけ。

振り返りもせず五杯目を注ぎ始める男に、女は瞬まばたきの間だけ苦笑を漏らしてすぐに笑みを浮かべ直した。

簡素なドレスと言ってもお世辞にはならないだろうほどに、少しばかり装飾の多い白いワンピース。

その背中に流した腰までの髪は淡い銀。細い眉とぷっくりとしたみずみずしい唇。

しかし女に月明かりは届かない。

西洋人形を思わせるその容姿も表情も薄闇に沈んで、たとえ背を向けていなくとも男の目には朧おぼろけ気にしか映らないだろう。それなのに。

「器用なもんだな」

五杯目を空け、更に六杯目を作りながら男が呟く。

一瞬たりとも振り返ってなどいない。横目で見える事さえしていない。

しかし、それは『勘』などというあやふやなモノではない。視界の外を薄闇の中を『見て』いるだけの事だ。

だから、女も驚かずその笑みを微かに濃くする。

そういう男であり、女だった。

「楽しそうなのは、これのせいかしら？」

ちらと足元、ほの暗いフローリングに広がる『水溜り』に視線を落とし女が囁いた。

女と男を結ぶ直線上に沈んだ歪こじな形の固まりが、より深く影を落としている。

「そう思つか」

ようやく振り返ったその顔は表情は凍りついたように硬く、笑みの欠片すらも浮かんではいなかった。

「いいえ。ぜんぜん」

艶然と微笑み、ぴしゃりぴしゃりと静かな水音を立てながらまっすぐに男へと歩み寄る女の足元で、『水溜り』にゆるやかな波紋が流れていく。

ごつり。小さな音とともに女の爪先に何かがぶつかった。

「あなた、邪魔よ」

いつそ甘やかに、囁くように言うと女はソレを脇へ蹴り払った。柔らかな言葉とは裏腹に、ごろごろと勢いよく転がりぐしゃりという音を立て壁にぶつかって止まる。

ソレに瞬きする時間だけ視線を落とし、しかし何の感慨も浮かべる事無く男は女に向き直る。

その眼に、微かに怪訝そうな彩いろが浮かんだ。

「何があつた？」

女の雰囲気は、男の知っているそれと少し違っていた。

上品さを、艶やかさを装い『女』という性を全面に押し出しているものの、その瞳に映る者は男も女もその全てを『物』としてしか認識していない。

誰からも利用されず利用される事を許さず、それでも寄ってくる者は利用し尽くした拳げ句に骨までしゃぶり尽くす。

男の知る女はそういう冷淡で冷酷な女だったはずだ。  
しかし今の女は違っている。

何かに浮かされたように焦点のぼやけた瞳。恋でもしたかのように上気した頬。先ほどまでの声音も常とは違っていたように思えた。

「現れたわ」

「現れた・・・？」

鸚鵡返しに問い返す男に、女はくすりと相好を崩す。

「ええ。『姫』が現れたのよ」

「・・・っ!？」

無感情だった男の瞳が、大きく見開かれた。

「ええ。その通りよ」

女の声に潜む愉悦。その瞳の奥には滾るような情念が漂う。  
男が先ほど感じた疑念の正体はこれだったのだ。

「とうとう現れたのよ。あの女が。あの『姫』が。ふふふつ。永劫  
と言っても足りないくらい永い永い時間を待っていた甲斐があった、  
というべきなのかしら？」

『陶然』とでも表現すればいいのだろうか。

楽しげに語る女の眼は現在を映してはいなかった。遙か昔に過ぎ  
去った日を、あの日、あの時を見つめていた。

「千と三百年、か」

応えて呟く男の声にも彩いろが宿った。女のそれとは異なり、苦々しくそして憎々しく。

鉄面皮のようだった顔にも、表情いづが揺れる。

「そうね。そのくらい経ったかしらね」

「かしらね」と言いつつ女は、そして男も、過ぎ去った年月を決して忘れてなどいない。十三の月が百度巡る間、ただその時だけを見つめて生きて来たのだから。

「なら、こんな事はもうやめだな」

「ええ。そうね」

足元の黒い『水溜り』に、そしてそこに沈むモノに目を落とした男が呟き、女が応えた。

二人の他に聞くものもないその声は、薄暗い室内に柔らかく響く。

「他の連中いひやには？」

「もう伝えたわ。貴方が最後よ」

「そうか」

「ええ。そうよ」

ならば、皆も同じ気持ちでいる事だろうな。

声には出さず、男はその面子を思い浮かべた。あの時から共に永劫とも思える時を歩んできた『理由』を同じくする者たちを。

「くつ。くくくくつ……あつは、あはははははははっ！」

不意にこみ上げてきた笑いが溢れるのを、男は敢えて止めようと



は思わなかった。

やっとこの時が来たのだ。来るとは思っていなかった、しかし心のどこかで確かに待ち続けていたこの時が、ようやく訪れたのだ。自分の中で歓喜が弾けるのを確かに感じている今ならば、笑うのも決して悪くない。

見つめる女の顔にも笑みが浮かんでいた。微笑でも艶笑でも哄笑でもない、それは楽しげとも寂しげとも、嬉しげともとれる妖しい笑い。

「・・・行くか」

「ええ。行きましょう」

「共に『姫』を・・・」

言葉の後半は宙に消え、誰もいなくなった部屋にグラスの落ちて砕ける音だけが虚しく響いた。

翌朝。

会社の接待で一晩家を空けていた男が帰宅して最初に目にしたものは、湯きかけたどす黒い血で染め上げられたリビング。

血だまりに沈んだ、手足が有り得ない方向に捻じ曲げられた首のない屍体。

そして。

厚さを失って壁に張り付き、眼窩から零れ落ちた眼球でこちらを見上げる、愛妻の生首だった。

## 05 「動き出す者たち」（後書き）

新章（というか、第1章）突入しましたっ！

頑張ってみたんですけど、やっぱり黒い描写って難しいですね、  
・、（シヨボーン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6877n/>

---

それさえもおそらくは普通の出来事

2010年11月11日18時37分発行